

人間の尊厳を学ぶ

津守 真

昨年、十一月二十三、二十四日に、お茶の水女子大学講堂を会場としてなされた「子どもの権利条約」についてのOMEPP東京フォーラムで、ポラー

ンドのジャドウィガ・シコルスカは、「ヤヌシュ・コルチャックの生涯と仕事にみる子どもの権利の考え」と題して講演された。コルチャックはすでに一九二〇年代に子どもの権利条約の先駆をなす考えを持っていたことから始まって現代に至るその歴史的経緯について述べられた後、シコルスカはコルチャックの次の言葉を引用して講演の結びとされた。これは現代のわれわれに対する挑戦のように響く。「子どもは人生の濁流の上をとぶ一羽の蝶であ

る。われわれがその羽根に持久力を与えようとするば、その飛翔力を損う。その羽根を鍛えようとするば、その羽根は破れてしまう。」

これはコルチャックの名著『いかにして子どもを愛するか』の第一部「家族の中の子ども」の一節である。子どもを濁流の上をとぶ美しい蝶にたとえるコルチャックは理想主義的ヒューマニストのように見える。しかし、この文章のすぐ前には、次のように記されている。

「人は言う『この子はこんな人になってもらわな」と困る、私はこんな子を望む』と。それにもかかわらず、人々は上等でなく平凡である。世の中はい

ずこも灰色である。人々は日常生活の中で忙しく歩き回り、小さなことに心配し、目先のことに追われ

……期待はみだされず、悔やみに歯がみし、永遠に待ち望み……不正は横行している。乾いた無関心が氷の風のように身を切り、偽善が人々を窒息させる。鋭い歯を持つ者が襲いかかり、臆病な者は低く身をかがめる。人々は苦しめられるだけでなく、汚物の中をのたうちまわる。あなたの子どもはどんなものになるというのか。闘争者か、ただの労働者か、指揮官か、兵卒か、あるいはただの幸福な人か。幸福はどこにあるのか、幸せとは何なのか、それを知っている人はいるか。あなたは子どもを守ることができるのか。」そして、これにつづいて「子どもは人生の濁流の上をとぶ一羽の蝶である」とつづくのである。これをよむと、コルチャックは如何に現実を直視していたかが分かる。子どもをの心を、破れ易い蝶の羽根にたとえる繊細な感覚の持ち主に

とって、現実はいかに厳しく感じられたかが察せられる。

講演の前日、シコルスカ女史は、国立博物館と私の養護学校を見たいと言われた。銀杏の葉の降りかかる上野の森の静かな一隅で、目を閉じてもこの風景が臉の裏にいつまでも残るようになっておきたいと、彼女は秋の夕暮れの香をかぐかのように何度も立ち止まった。翌朝、講演の直前に会ったとき、彼女は昨夜は遂に一睡もできなかったと言った。私の養護学校の子どもたちの顔がひとつひとつ思い出されたのだという。そして、あの子どもたちは人間の尊厳さ（ディグニティ）をもって生きていたと言われた。私はこれまで障害の原因は？ 将来は？ との質問は多く受けたが、「尊厳さをもって」と言われたのは初めてである。私はこの人の、その繊細な感覚と見方に驚ろかされた。これは保育者の心である。

（愛育養護学校）